

おとぎり草～酒井明 説話集 13※～

野や山、海に育つものの中には食べれるもの、薬になるもの、着物をきれいに染めたり、人間の暮らしを豊かにしてくれるものが一杯あることは皆さん知っての通りです。

自然の中で暮らしている動物の中にも、色々な役に立ってくれるものが一杯居るのです。

昔の人はそんな役に立つことをどうして知ったのでしょうか。時には毒草を食べて苦しんで、これは駄目だと知ったこともあったでしょう。草の葉の汁が付くとなかなか落ちない。それを利用して染物を始めたのでしょうか。

小鳥たちが食べている木の実を口にしてみると、美味しいもの、何ともならないもの色々あって、人間と小鳥の違いを考える様になったでしょうが、その小鳥たちも時には体の調子を損なう事もあるのです。

そんな時、おとぎり草という汁を吞ませるとたいがい治ると昔の人は言いました。

昔ある所に、仲の良い兄弟がいて谷間の畑を一生懸命手入れしていました。ところが、ちょっとした不注意で弟が足を滑らせてしまいます。痛がる弟に、薬もないので兄さんは近くにあった草の葉を揉んで付けてやりました。

すると不思議なことに痛みが段々とれてくるのです。こんなに効き目があるなら、痛む病気には良いだろうと色々試してみました。

この事を兄さんは弟にだけには教えました。そして、これは誰にも言うなと口止めしたのです。

ところが、近所のお年寄りが神経痛という病気で苦しんでいたのが、弟はこの草を使ってみなさいと教えてあげました。それを知った兄さんは、あれ程口止めしていたのにと、かんかに怒ってとうとう弟を刀で斬ってしまいました。

それからというもの、人々はこの草を弟切草と呼んで薬の効き目を利用する様になったそうです。



※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会（当時）長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。